令和元年度　国語科学習指導研究委員会

一　テーマ

児童・生徒一人ひとりが自己の高まりを実感できる国語教室
～国語科としてのよりよい言語活動の充実を目指して～

二　テーマ設定の理由

本研究会ではこれまで、日常の授業の改善や活性化を目指し、教育課程研究協議会の授業校の授業や各委員の実践について、意見交換や情報交換をすることで、国語科の授業の在り方について学び合ってきた。

昨年度までの取り組みをふり返り、改めて各委員が日々感じる国語科における課題を話し合う中で、様々なニーズをもつ子どもたちを含めた全ての子どもたちが、目を輝かせ、力を発揮することができる国語の授業を目指したいとの共通の願いが見えてきた。

そこで今年度も、子どもたちが主体的に教材と向き合い意欲的に学ぶ中で、自分の考えを見つめ、友の考えを知り自分の考えを深めていくことができる授業づくりに向け、日常の授業から様々な角度で広く学び合いたいと考え、本テーマを継続して設定した。

三　研究の経過

５月　７日	第１回委員会　年間計画など	教育会館
６月　３日	第２回委員会　小学校教育課程事前授業 ３年生の授業参観　研究会	清明小学校
６月２７日	第３回委員会　中学校教育課程事前授業 ３年生の授業参観　研究会	菅平中学校
７月１９日	第４回委員会　教育課程午後の部 準備	教育会館
９月　５日	教育課程研究協議会　国語研究会	清明小学校・菅平中学校
１１月２８日	教育会総委員会 第５回委員会　研究のまとめ　活動の反省	教育会館

四　研究内容

１　清明小学校の実践授業より

（１）研究テーマ
『言葉に向き合いながら、読みを深めていく子ども』

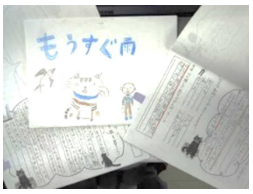
（２）研究の概要
年度当初に、先生方と国語の授業について情報交換をする中で以下のような実践上の悩みが話題になった。

・授業のスタイルがいつも同じになってしまう。
・子どもたちが考えを広げたり、深めたりしているのか疑問。
・授業の着地点がわからない。
・つけたい力がついているのか疑問。

この悩みに、本校の子どもたちの読む力をさらに伸ばすヒントがあると考え、実践を積み重ねてきた。

（３）３年生の実践（６月）

教材名　　「もうすぐ雨に」
物語の終末に、猫のトラノスケはぼくに何と言いたいのかを考える場面で、今までの出来事や、登場人物の行動、気持ちを表す叙述に着目して読み、登場人物の気持ちの変化について想像することをねらいとした授業。

子どもの姿	考察
〈考えを発表しながら聞き合う場面〉 『雨が降ると言葉が聞こえなくなるから』という子どもの意見に対して　先生は「ちょっと待って、雨が降ったら言葉がしゃべれなくなるの？」と全体に問い返した。すると子どもたちが再び考え出した。「７場面の終わりに、雨音にまぎれてきえてしまったって書いてあるから･･･。」と口々に語り出す子どもたちに対して「雨が降ったから聞こえなくなったの？」とさらに問い返す。子どもたちは「う～ん…」と考え続けた。 〈振り返りの場面〉 R 児「トラノスケノの言葉を勉強して、なんで雨が降ると言葉がしゃべれなくなるのかということも考えられました。」 S 児「トラノスケは本当はたくさんしゃべりたかったけど、チリンとなってしまって口をきけなくなってしまったのかなかと思いました。」 K 児「(みんなの発表を聞くと）みんな優しい言葉（が共通点）で、やっぱり共通点的にみんなやさしいだなと思いました。」  ↑ポートフォリオのように１冊にまとめられた学習カード	教師は、「動物の声が聞こえなくても、動物が何を言いたいのかわかるようになった」という主人公の気持ちの変化や成長を考えることをねらい、「雨が降ると聞こえなくなるのか」と問い返した。この時間では、「聞こえなくなった」という内容の理解にとどまったが、教師が意図をもって問い返すことで、子どもたちの思考が再び始まり、新たな問いが生まれてくるのではないかと考えられる。この時間、この単元で育てたい資質、能力を教師自身が明確にしていることで、ねらいにせまる問い返しができるのではないだろうか。 **資質・能力を育てるために、どの言葉に着目し、どのように考えるのかという視点で教材研究していく** 振り返りでは、R 児のように「自分の学習姿勢について振り返る子」、S 児のように「学習内容について振り返る子」、そして K 児のように「友だちの感じ方について振り返る子」など、子どもたちの振り返り方は様々であった。このように様々な振り返りを発表するだけでは、子ども自身が「授業で何を学んだのか」を実感していくことは難しい。そのため「今日は何を学んだのか」ということを本時のねらいに照らし合わせて観点を焦点化していく必要があるのではないかと考えられる。そして、その振り返りを視覚化できるような形で蓄積していくことも、系統的に学びを実感していくことにつながるのではないだろうか。 **子どもたち自身が何を学んだのかを実感しやすくするために振り返りを焦点化する。そして蓄積していく。**

（４）１学期の実践の中から見えてきたこと

①育てたい資質・能力を身につけるために、教材のどの言葉に着目しどのように考えるかを教師自身が明確にする。
→言葉にこだわって学ぶことで、読みや考えが深まっていくのではないか。
→育てたい資質・能力を明確にすることで系統的に学ぶことができ、読む力が定着していくのではないか。

②思考の視覚化と積み重ね。
→自分の考えをまとめたり、学びを振り返ったりすることにつながるのではないか。

③振り返りの時間の充実と振り返りの観点の焦点化。
→子どもたちが何を学んだか、何が身についたかを実感しやすくなるのではないか。

（５）５年生の実践（教育課程研究協議会）

教材名　「大造じいさんとガン」
　場面ごとに、大造じいさんの残雪に対する気持ちを考えてきた子どもたちが、「次の年、大造じいさんは残雪をうつのか」という物語の続きを考える場面で、今までの学習を振り返りながら根拠をもって考えを交流させ、大造じいさんの気持ちを改めて考える授業。
　学習問題「次の年、大造じいさんは、残雪をうつのだろうか。」
　学習課題　①叙述や気持ちメーターを根拠にして、自分の考えを伝えよう。
　　②自分と友だちの考え、根拠、気持ちメーターの違いを比べて大造じいさんの気持ちを考えよう

①子どもたちの姿と考察

子どもの姿	考察
考えの根拠が４人とも「おうい、ガンの英雄よ･･･」という叙述のグループ 〈前時までの子どもたちの考え〉 A児･･･「つかまえるだけ」　B児･･･「打つ」　C児･･･「打つ」　D児･･･「打たない」	
（グループの話し合いの中で、順番に自分の考えや根拠を述べた後） A児「やっぱり打たずにつかまえるだけたと思う。“いまいましく思っている”ってところから、ただ勝ちたいっていう気持ちがあったと思う。さらにに３，４場面で仲間を助けてから余計その気持ちが強くなっていったと思う。残雪は大造じいさんにとって獲物というよりかライバルだから。獲物として食べるんじゃなくて、ただ勝ちたいだけだよ。人間もオリンピックで勝ちたいとかあるじゃん。そういう気持ちと同じだと思うよ」 C児「そうか…。“食いたい”じゃなくて“勝ちたい”か…。」（考える） B児（教科書の叙述をみんなに見せながら）「たしかに。“いつごろからかこの残雪が来てから１羽のがんもとれなくなっていたのでいまいましく思っていました”って書いてあるから、来るまではとれていたってことだよね。」 C児「そうか。だから残雪を倒したらまた狩りができるってことだ。始めのころは、勝負っていうより、残雪を倒せば、またたくさんのガンがとれるって考えていたんじゃないかな。」 A児「そうそう。だから僕はそこから始まって（物語が進むにつれ）大造じいさんの気持ちがどんどん変わってきたと思うよ。」 B児「たしかに。最後の顔笑ってるもんね（最後のページの大造じいさんの挿絵を見せながら）。」 C児「俺、今の話聞いて、叙述を読んだら、（自分の意見が）打たないって変わったわ。」 D児（今までみんなの話を聞いているだけだったが、初めて笑顔を見せる） B児「私も。“いまいましく”って言葉から、残雪は他のがんと違って、獲物っていうより…。だから殺さなくてもただ勝ちたいって気持ちかな。…でも勝ったらその後どうするんだろう？」 C児「でもやっぱり食料は必要だからな…。狩人だもんね。やっぱ殺すのかな。（もう一度最後のページを読む。）でもここに“見守っている”って書いてあるから･･･普通見守らないよね、殺すんならさ。やっぱ殺さないか。」 （終わりの合図が出ても、まだ話し続けている。）	A児が“いまいましく思っている”という叙述に着目した考えを述べたことをきっかけに、複数の叙述を結び付けながら、大造じいさんの気持ちを改めて考える子どもたちの姿が見られた A児の考えを聞いて、教科書を読み直したしたB児が“いつごろからか～”の叙述を改めて読み、再考し、物語の全体像を問い直す発言をした。そのことで、自分の考えに迷いが生じていたC児の考えが明確になっていった。C児は、対話を通して新しい考えを構築できたことに満足そうな姿を見せた。 B児から「その後はどうするのか？」という新たな疑問が生まれた。C児は“見守っている”という叙述から登場人物の相互関係や心情についてさらに深く考える姿が見られた。

②主な協議事項と参観者から出された意見
〈いままでの学習を基に、根拠をもって考えを語る姿、友の意見を聞き、考えを深める姿が見られたか〉
・子どもたちの中に今までの学習で着目した叙述が入っていたからこそ、いくつかの叙述から根拠をもって語る姿が見られた。
・話し合いの中で、叙述と挿絵の表情などを関連させて考える姿や再度叙述に戻りながら、大造じいさんの気持ちを考える姿が見られた。
・物語の主題に迫るという部分では、今後に課題が残された。
〈焦点化した振り返りの場面で自らの学びを実感する姿が見られたか〉

・同じ叙述でも捉え方によって考えが違うことを感じたり、友と意見や感想を共有し合ったりする中で、自分の考えを深めている姿が見られた。
・グルーピングを工夫したことで、話し合いの中で考えが揺さぶられたり、より確信をもったりする姿が見られ、学びの実感につながったのではないだろうか。

③久保先生指導
・今日の授業のように言葉による見方、考え方を働かせると深い読みにつながる。
・対話をすることが大事。対話によって、考えを構造化したり、広めたり、新しい考えを作ったりすることにつながる。
・本時をどうまとめるか、また考えてほしい。やはり焦点化して振り返ることは大事。
・学習指導要領の「共有」という部分、本時でも大事にしてほしい。子どもたちは確固たる考えを持っている。それをどう共有するか。例えば「今日友だちの考えを聞いて何を感じましたか。」でもよい。拡散で終わらせてもよい。

（6）研究の成果と今後の方向
２学期末までの研究について、長野県教育委員会から出されている「授業がもっとよくなる３観点」に沿って成果と課題を振り返ってみた。

ねらいを明確に
○育てたい資質・能力を明確にすることで、授業の着地点を考えながら、単元展開や１時間の授業をデザインするようになってきた。こうすることで、導入や展開がスムーズになり、子どもたちの学びやすさにもつながっていくのではないだろうか。
○育てたい資質・能力を明らかにすることで、「系統的に学ぶ」ことを教師自身が意識するようになっている。今後は、子どもたちにも系統的に学んできた実感がもてる手立てを考えていきたい（振り返りを蓄積するだけでなく活用をしていく等）。

めりはりをつけて
○どの言葉に着目し、どのように考えさせるかを教材研究の中で明らかにし授業に臨むことで、子どもたちが言葉にこだわって学ぶ姿が見えてきた。そのことから、深い読みにつながっていると感じる。
○思考の視覚化を意識したことで、子どもたちが自分の考えを見直したり、友と関わって考えたりすることができ、考えが広がったり、深まったりしていることにつながっていると感じる。

ねらいの達成を見とどけ
○振り返りの時間を意識的に確保するようになった（最低７，８分）。
○振り返りの観点をねらいに沿って焦点化することで、この時間（単元）に、子どもが何を振り返ればよいか明確に示すようになっている。そうすることで、子どもたちも学びを振り返りやすくなるのではないだろうか。
●子ども自身が何を学んだか「実感する」というところでは課題が残った。実感するためには、振り返りの発表で「何をどう共有していくか」を考えたり、単元の最後に単元全体を振り返る時間を設けたりするなど、さらなる工夫が必要だと感じている。

２　研究協議より（小学校）

協議題	出された意見	話題になったこと（課題）
国語を軸としたカリキュラムマネジメントの演習	学年別グループに分かれ、国語の教科書に示された単元・教科と、生活科・総合、学校行事、他教科との効果的な連携を図る「年間カリキュラム」を作成した。 １年生（Ａ・Ｂグループ） ・生活科と効果的な連携が図れそうである。 アサガオを育てる活動に、手紙の単元や 物語文「ずっとずっと大すきだよ」を関連させたり、秋さがしや学校たんけん、来入児さんへの招待状作りの活動に、「しらせたいな見せたいな」の単元を結びつけたりといった工夫ができそうとの意見が出された。	この年間カリキュラムは、図書館の有効活用にもつながりそうである。 言葉に出会う新鮮な感動を大切に、体験と結びつけ、楽しんで取り組める国語の授業づくりを進めたい。 数字や絵など、日常に直結する展開の工夫を積極的に取り入れたい。

国語を軸としたカリキュラムマネジメントの演習	２年生（Ｃ・Ｄグループ） ・生活科を中心に、体育、図工、音楽、道徳と横断的に取り組むアイデアが出された。 ・「あったらいいな こんなもの」や「しかけカードの作り方」「みんなで きめよう」など、相手に伝える学習を充実させていきたいとの意見が出された。	誰に何を伝えるか、相手意識を明確にした展開を工夫することで、学んだ言葉が生きる体験を積み、国語を学ぶ楽しさが実感できる展開を工夫したい。
	３年生（Ｅグループ） ・社会科や総合での調べ学習を、国語の学習と連携させるアイデアが、たくさん提案された。 ・「すがたをかえる大豆」や「ほうこく書を書こう」では、総合や社会科見学で見聞きしたこと、資料から調べたことを国語の時間にまとめる学習が展開できそうである。	国語と調べ学習との連携に伴い、行事に合わせた単元の入れ替えが効果的であるが、単元を入れ替える際は、教科書の配列から、積み上げる力に無理がないかを確かめたい。
	４年生（Ｆ・Ｇグループ） ・４年生の教科書には、新聞・リーフレット・手紙・紹介カードなど、様々な形での「書く活動」が登場することから、社会科見学、クラブ活動、運動会や音楽会などの行事に加え、読んだ本の感想や未来への希望など、自分の考えや思いを表現する活動を充実させていけそうであるとの意見が出された。	新聞やリーフレットなど、それぞれの違いを教師自身がしっかり捉えて、子どもたち自身が単元の見通しを持って取り組めるような支援を大切にしたい。
	５年生（Ｈ・Ｉグループ） ・「次への一歩 活動報告書」では、キャンプのふり返りや児童会の活動報告を他校と交換し合うなど、次年度に具体的な活動として生きる展開の工夫や相手意識をもって取り組む工夫が、数多く提案された。 ・「敬語」の学習を、インタビューや招待状作りに、「日常を十七音に」の学習を米作りやキャンプの活動発表に結びつけるなど、５年生ならではの活動が効果的に国語の学習に結びつけられそうである。	１学期からたくさんの活動や行事に追われる、忙しいイメージの強い５年生だからこそ、日常に国語学習を効果的に結び付けた年間の見通しを持つことが、必要不可欠になる。今回の演習を参考に、ぜひ自校の年間計画を見直してみたい。
	６年生（Ｊグループ） ・討論会、意見文、スピーチなど、自分の考えを主張する学習活動について、学級、学校全体、地域、さらにその先へと広がる展開の工夫が提案された。 ・「未来がよりよくあるために」では、平和学習との横断的な取り組みに加え、職場体験、児童会や運動会など、自分の足元から考える展開についても話題になった。	子どもたち一人ひとりが自分の考えをもてるよう展開を工夫すると共に、個への支援も大切にしたい。また、小学校の六年間で積み上げてきた国語の力を、子どもたち自身が自覚できる機会を設けたい。

３　菅平中学校の実践授業より

学習指導案

１　単元名　　状況の中で　『故郷』

２　単元目標

・作品からその時代背景と社会の特徴を捉え、その中で生きる人と人との関わりについて考えようとしている。　【関心・意欲・態度】

・場面や登場人物の設定、情景描写、心情表現に着目して、内容を捉えることができる。　【読む　ア・イ】

・主人公のものの見方と、登場人物の生き方の変化を捉え、時代と社会の中で生きることについて考えをもつことができる。　【読む　エ】

３　教材について

『故郷』は、中国の小説家・魯迅の作品である。語り手の「私」は二十年ぶりに帰郷するが、それは決して楽しいものではなかった。美しい故郷の姿はすでになく、そこには鉛色の空の下にわびしい村々が広がっていた。住人たちも当時の姿とは大きく変貌しており、かつて豆腐屋小町と呼ばれ、店の看板娘であったヤンおばさんは、両手を腰に当て、足を大きく広げて立つ「コンパス」となっていた。さらに「私」は、すいか畑の銀の首輪の小英雄・ルントウと再会するが、「悲しむべき厚い壁」が自分たちを隔ててしまったことに気づく。こうして故郷の悲しき変貌を目の当たりにした「私」は、失意のうちに村を後にする。帰郷の旅の終わりを告げる舟の中で、「私」は次の世代の人々が自分たちの経験しなかった新しい生活をもてるよう未来に希望を委ねるのだった。

生徒たちはこれまでに『大造じいさんとガン』や『握手』を読んで、人が生きるという姿に触れながら自分自身の生い立ちや理想を重ねたり、当時の社会と今の社会とを比較したりしながら問いが立ち上がる教材に触れてきた。『故郷』も、登場人物や故郷の回想の中の印象と現在の表現の比較を通して、主人公の心情の変化を読み取ることができる作品である。問いから自分の考えをもって仲間と交流し、考えを広げたり深めたりすることができる教材と考えた。

４　単元で目指す生徒の姿

① 登場人物や場面設定に、作者の意図やその効果を評価しながら、内容を捉えている。

② 仲間との関わりを通して自分の考えをより確かなものにしている。

③ 仲間と読み取ってきたことを元に登場人物へのメッセージという形で自分の考えを述べている。

＜評価＞

・物語を評価する視点をもって、仲間と読み取ってきたことをもとに、あらゆる状況の中で人が生きていくことついて自分の考えをもつことができる。

5　単元展開

		学習活動	指導上の留意点	評　価
第一次	1	・単元の目標の確認 ・本文を読む。 ・初感を記入する。 ・初感の交流をする。	○学習の見通しがもてるようにこの単元は、一人一人が自分で問いを立て、それを自分で追究していき、あらゆる状況の中で人が生きていくことについて自分の考えをもつ単元であることを確認する。 ○漢字を読むことが難しい生徒には、ふりがな付の教科書を配布する。 ○教師が範読し、難解な語句にはマルをつけるよう指示する。 ○『故郷』は語り手の「私」が自分の故郷に帰る話であることを確認する。 ○感じたことを学習カードに記入する。疑問を書く。 ○全体で感じたことを交流する。	登場人物の生き方や考え方、作品の構成などに関心をもって読む。（関心・意欲・態度） 初発の感想をまとめることができる（学習カード）
	2	・故郷クイズを解く。 ・本文を場面ごとに分ける。	○クイズを解き、作品の流れや登場人物を確認する。 ○学習カードを配付し、答えを記入にする。 ○教師が本文を場面ごとに分ける。 ○本文内の場面が分かれるところに線を引く。 ○次時は個人追究を行っていくことを提示する。	『故郷』の基本確認事項や登場人物を理解することができる（学習カード）
第二次	3	・個人追究のテーマを決定する。 ・自分の追究したい問いを発表する。	○本文を読んで問いに思ったことを、「私はなぜー」「ルントウはなぜー」「作者はなぜー」などの問いの形式にしていくつも挙げる。 ○場面ごとに黒板に提示していく。 ○挙げた問いの中から、自分の追究したい問いを決め、学習カードに記入する。 ○全員の問いの内容が分かるようにする。	個人追究のテーマを決定することができる（学習カード）
	4	・前時の内容のおさらいをし、個人追究の見通しをもつ。 ・追究方法を例示し、自分の問いにふさわしい追究方法を選択する。 ・個人追究を行う。 ・追究のまとめを行う。	○個人追究の見通しをもたせる。 ○それぞれが立てた問いについて追究する方法を選択する時間をもってから追究する。 ○本時の見通しがもてるよう、教師が本時の学習カードの内容を全て記入したものを例示する。 ○いくつかの追究方法を提示する。 ○追究方法が決定したら、個人追究を始める。 ○追究のやり方に困っている生徒には、教師がアドバイスを行い、追究方法に応じたヒントカードを使っても良いことを確認する。 ○書くことに苦手意識をもっている生徒には、教師が問いかけをしながら自分なりにまとめを書けるようにする。	・場面や登場人物の設定、情景描写、心情表現に着目して、内容を捉えることができる。（読む　ア・イ） 自分で立てた問いに対して、自分なりの方法で導いた考えを、学習カードに記入することができる。（学習カード）

第三次	5・6（本時）	・個人追究でまとめたことを発表する。 ・仲間の追究に関する意見や感想を発表する。 ・問いに対する最終結論や、単元を通して学んだことを記入する。	○発表の順番は内容によって教師が指定する。 ○自分の問い、使った方法、そこから気づいたことを発表するよう指示する。 ○各自の追究プリントを冊子にして配付する ○司会進行は生徒が行う。 ○一人の追究に対して、全員で考える時間をもつ。	・主人公のものの見方と、登場人物の生き方の変化を捉え、時代と社会の中で生きることについて考えをもつことができる。（読む　エ）
	7	・前時の発表を踏まえ、個人追究の最終結論を出す。 ・登場人物の誰かに手紙を書く。	○発表を経て仲間の意見を聞いたうえで、問いに対する最終結論を記入し、単元のまとめを行うよう指示する。 ○個人追究の中で一番気になった登場人物に対して手紙を書く。	仲間の意見を参考にして、自分の考えを明確にすることができる（学習カード）

6　本時案

【主眼】それぞれの問いを個人追究してきた生徒たちが、叙述から気づいたことや追究の中で生じた疑問を発表しあい、お互いに意見を伝え合うことを通して、自分の考えをさらに深めることができる。

	学習活動	生徒の意識	支援と評価	時
導入	学習問題：文学的文章『故郷』を読んで、自分の考えをもとう。			
	1．発表の流れを確認する。	・仲間の発表から新しい視点に気づきたいな。 ・自分の発表がうまくできるか心配だな。	・本時は個人追究でまとめたことや疑問を発表する時間であることを確認する。	4
	学習課題：仲間と意見交換をして、問いに対する自分の考えを深め合おう。			
展開	2．発表者の問いを確認する。	・発表者の問いはどんな問いかな。	・司会進行は生徒が行う。 ・発表者の問いを確認し、問いに関わる場面を改めて読む。 ・困り感をもった生徒の隣に座り、見るべき資料や叙述を示す。語句の意味を補足する。	34
	問い：ホンルが「だって、シュイションが家に遊びに来いって」と言った時、私と母が「はっと胸をつかれた」とあるが、どんなことを思っていたのか。			
	3．発表に関わる場面を読む。 4．発表者の発表を聞く。	・そのホンルの発言はどの場面にあったかな。 ・発表者の結論を知りたい。 ・「これ以上関わらないほうがいいと思っている」という結論は、本当かな。	・発表の内容が分からなかった生徒には、もう一度学習カードや関連する叙述を見せ、要点が理解できるよう支援する。	

展開	5．各自の考えをまとめる。 6．各自の考えを発表し、討論を行う。 7．二人目、三人目の発表を行う。	★ホンルとシュイションが今後も関わり合おうとしている様子を見て、思わず自分とルントウを重ね、いたたまれなくなって言葉を濁したのではないか。 ・「私」が船に乗っている場面で、彼らには自分たちと違う形で関わってほしいと考えたのではないか。 ・確かに、子どもの２人はもう関わらないほうがいい。 ・彼らには何らかの新しい生活を「共に」してほしいのだと思う。 ・○さんの注目した叙述にはこんな意味があるのか。 ・自分が考えていたこととは違う考えだな。	・発表の後に「はっと胸をつかれた」時点での「私」の心情を問いかける。★が出た時点で、「私」はホンルとシュイションにどうなってほしいと考えたのかと問いを変えて考えさせる。 ・書くことに困っている生徒には、発表内容について整理して書くようにする。 ・討論の中で、自分の考えではなく、「私」や「私の母」はどう考えているかを読み取るよう促す。 ・発言が難しい生徒には、教師が質問を投げかけて意見を聞き、討論に参加できるようにする。 ・生徒の発言の中で、根拠が不明確なものに関しては、根拠となる叙述を述べるよう促す。	
まとめ	8．本時の振り返りを行う。	・自分では気付かなかった新たな考え方を知った。 ・仲間の考えを聞いて新しい疑問が出てきた。 ・自分の考えがより確かなものであると分かった。	・問いに対する仲間の考えを聞いて、自分の考えを深めることができたか。 仲間との交流を通して新たな気付きや考えを得て、問いに対する自分の考えを深めている。 （学習カード）	12

見ていただきたい点

１．自分の考えを仲間と共有し意見交換を行う場を設けたことは、新たな気付きや考えを深めることにつながったか。

２．討論会での教師の支援は、困り感をもった生徒が考えを深めることにつながったか。

7 授業研究会より

観点１　自分の考えを仲間と共有し意見交換を行う場を設けたことは新たな気付きや考えを深めることにつながったか。

○生徒同士がかかわる場を設けることは良い。

●意見交換をする以前に、読み取りの指導をしっかりとしておく必要がある。ある程度読みとりができた状態での意見交換にするべき。

●読み取りが難しい単元のため、生徒の意見交換だけでは目指すべき姿までいきつけないのではないか。場面によっては、必要に応じて教師が出て、指導支援する必要がある。

●ある一部の生徒の読み取りで、意見交換や話し合いが進んでしまっているので、教師がきちんと出る必要

がある。

●叙述を基に読みとりができている生徒がいたので、その生徒を評価し、授業の中で位置づけるする必要がある。

●意見交換をすることで、広まりはあったと思うが、深まり（考えの再構築）があったのかは不明である。

観点２　討論会での教師の支援は、困り感をもった生徒が考えを深めることにつながったか。

○教師、仲間が日ごろから助け合っていることがよく感じられた。

●困り感を持った生徒の、困り感に合わせた支援を用意するのは良いが、教師の願いに即したものとなるようにしたい。

●公開授業学級が少人数ではあったが、それぞれの生徒の理解力や語彙力に大きな差があることを感じた。

●６人という少人数で授業を行うことの難しさを感じた。

●国語のねらいを達成するために重要なことや必要なことについては、共通理解をする場をしっかりと設けるべきである。

８ 考察

（１） えんたくんを利用しての意見交換について

生徒たちは、えんたくんに書き込んだメモを見ながら、一人ひとりの考えに積極的に反応しあっており、この　ツールの有効性を感じた。一方で、えんたくんを使った話し合いの進め方に課題を感じた。共感する時間、疑問をもつ時間、叙述に返る時間など、話題や目的に応じた時間配分があるとよかった。

また、えんたくんの活用の仕方として、話し合いの場で「多くの意見を求める」上では有用だが、「一つの事柄について解決する」目的での使用は、まとめ方に難しさがあるように感じた。

（２）「深める読解」とは

今回の研究において、「独自の読み取りをした生徒の考えの変容の必要性」が議論となった。

あらゆる読み物は「叙述を根拠に」読み込むことが大前提である。しかし文学的文章においては、読み手によってその作品や叙述にさまざまな解釈が生じることがある。その解釈は、その人のもつ知識や考え方、人生観といった様々なもので構成されており、一つとして同じものはない。『故郷』に対する生徒の受け取り方も、同じように様々であるため、正しい読み取りの導き方に困った。国語科の中で議論しても様々な解釈が存在する『故郷』という作品を、生徒たちが、たった数時間の授業の中で向き合うためには、やはり単元を通して「考え続ける」ことが必要なのではないだろうか。

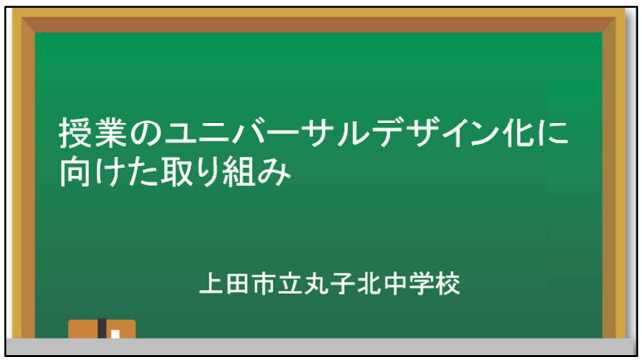
追究の過程での自分の考えに満足せず、次の時間へ、次の時間へと考え続ける。そうすることで、生徒がたとえ途中で作品の本質とは異なる読み取りをしていたとしても、時間を追うごとに新たな着眼点に気づくことができるはずだ。そして、私たち教師がすべきことは、生徒に単元を通して考え続ける手立てを与えることである。

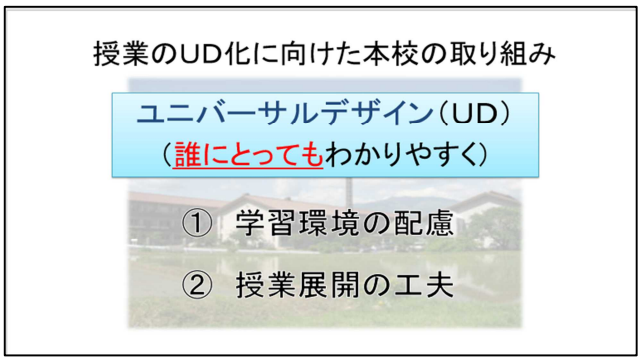
場合によっては、数時間の授業の中だけでは結論にたどり着くことはないかもしれない。生徒の今後の人生の中でたどり着く結論もあるだろう。生徒が卒業してから、あるときふと中学校で読んだ作品を思い出し、改めて読み直してみる。そこでまた新しい答えに気付く。そんなふうに、生徒の心に残っていく授業を仕組みたい。

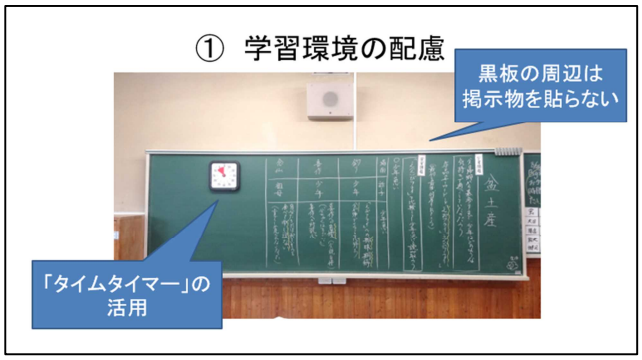
「考え続けること」。教師としての在り方としても、生徒に願うこととしても、この一言がキーワードになるはずだ。

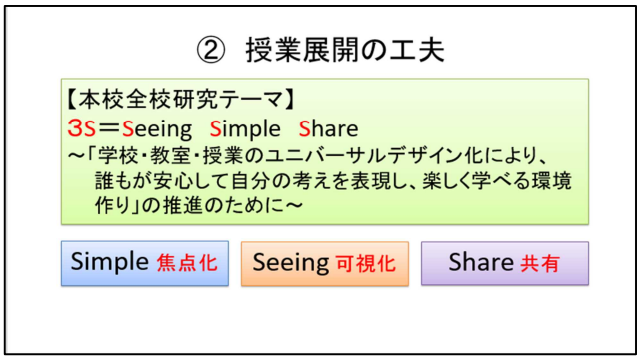
4　研究協議（中学校）より

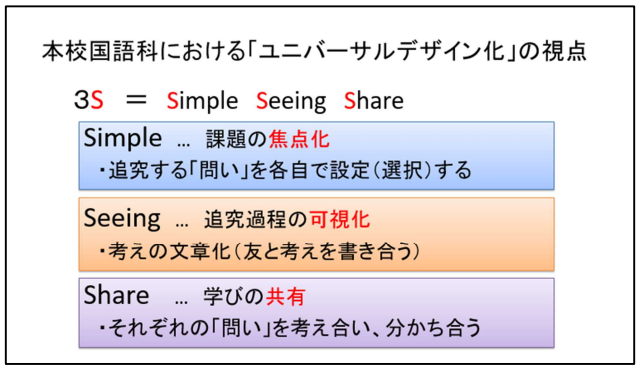
研究協議会Ⅰ　「授業のユニバーサルデザイン化に向けた取り組み」（丸子北中）

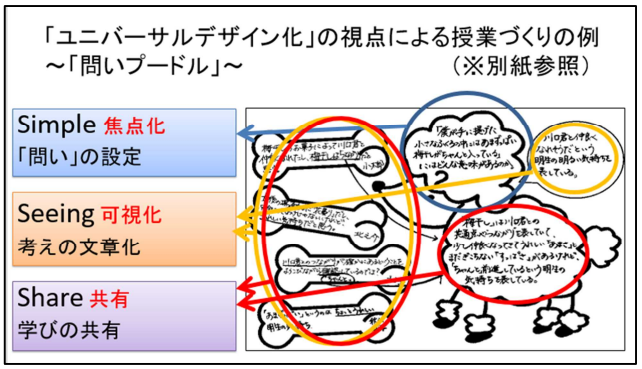


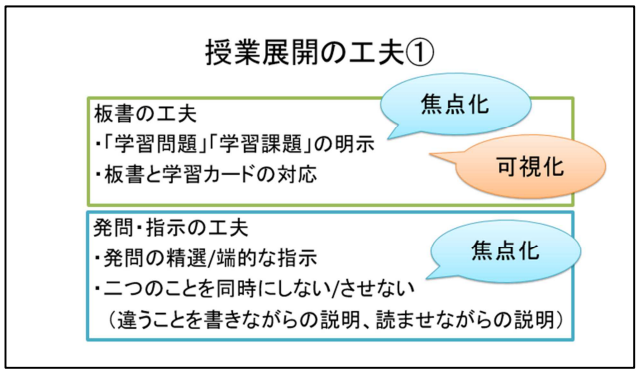


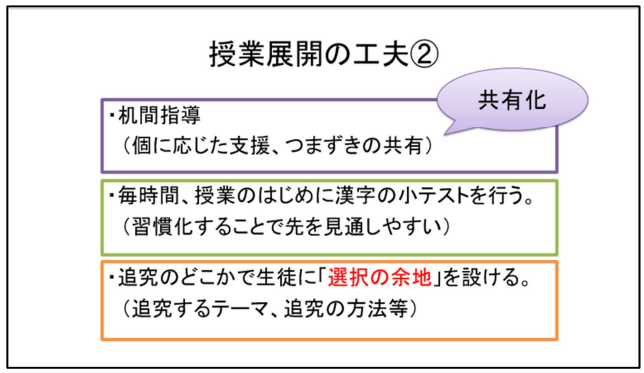












協議題	出された意見（〇結論）	残された問題
各校でのユニバーサルデザイン化の実践報告と 情報交換	**《遠山先生（四中）の報告より》** ・ホワイトボードは「①視覚的に表す②考えをまとめる③皆で考える手段」として有効である。個で考えるのが難しい生徒や、教師が生徒の考えや間違いを把握する点でも有効である。 **《小林先生（丸子北中）の報告より》** ・「学習環境の配慮」と「授業展開の工夫」を行っている。 ・板書の工夫（板書と学習カードを対応させる）や発問・指示の工夫（読むことと書くことなど、２つのことを同時にさせない）。 〇ユニバーサルデザイン化は、特別な配慮を要する生徒だけでなく、「どの子も目を輝かせ、力を発揮することができるように」という視点が重要である。 〇時間やねらい、授業の見通しや考えなどを「可視化」できるようにすることは有効である。	・（情報交換が十分に行われなかったため）各校の取り組みをどう共有し、どう活かしていくか。

研究協議会Ⅱ　資料

「問いプードル」とは

１　「問いプードル」のねらい

文学的な文章においては、登場人物の言動や、心情描写、情景描写の意味を考えることが、「読み」を深めるための手立てとなり得る。それらの叙述から「問い」を設定する際、生徒は「なぜ～」という「問い」の形を使いがちだが、これは簡単に「問い」を作ることができる反面、学びが深まらない「問い」になりやすいという問題を含んでいる。そのため、そういった叙述について、「～にはどんな意味があるのか」という形に限定して「問い」を立てることが、課題の焦点化につながり、効果的な学習活動になると考えた。

さらに、上記のような学習を通して、それぞれの生徒が自らの「読み」の変容を自覚するためには、その過程を「見える化」する必要があると考えた。そこで、登場人物の言動や、文章中の表現に着目し、「問い」の設定から結論の記述までを１枚のシートで学習することをねらいとして「問いプードル」を考えた。

２　「問いプードル」の使い方

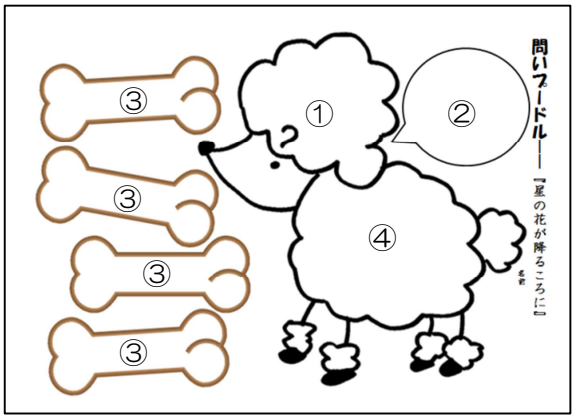
「問いプードル」は以下のような手順で学習を進める。

① 自分が追究したい「問い」を「～にはどんな意味があるのか」という形で書く。

②「問い」に対する「予想（現時点での考え）」を書く。

③「問い」に対する友の考えを記入してもらう。

④ 友の考えを参考に、「問い」に対する自らの結論（「答え」）を書く。



３　「問いプードル」への期待

この学習法では、異なる「問い」をもつ生徒同士でグループ活動を設定することができる。生徒が同じ「問い」をグループで追究する際は、理解の不十分であった生徒が他の生徒の意見で理解を深める一方、リーダー格となる生徒は周囲に教えるだけで、自らの考えを深められないことも予想される。しかし、異なる「問い」をもつ生徒が、互いの「問い」を考え合えば、主人公の心情や、その変化について、異なる視点から見ることができ、結果として自身の「問い」の解決に役立てることが期待できる。このことから、グループ内でリーダー格となる生徒も他の「問い」を考えることで、自らの「問い」についての考えを深められると考えた。

また、この学習法で課題の設定とその解決に向けた読み取りを繰り返すことを通して、題材が変わっても、自ら「問い」を立て、叙述を根拠に「問い」に対する考えをもつことが、「読み深める」方法になるということを、生徒自身が体感できると考えた。これは文学的な文章を読み深めるための方法知であり、「『学び方』を学ぶ」活動になることが期待できる。

令和元年度　教育課程　午後の部

◆　『故郷』について、以下の疑問点や日頃の指導で先生方が抱いた疑問点について考え合う。

① 「このとき突然、私の脳裏に不思議な画面が繰り広げられた――紺碧の空に、金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。その真ん中に、十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。」と「まどろみかけた私の目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。」に何か関係はあるのか？

② （①の叙述に関して）類似の情景描写が、冒頭と週末に出てくる。それぞれの描写の違いと「私」の心情との結びつきにはどのような意味があるのか？

③ ヤンおばさんとの会話で「これを売って、その金で……。」と言っておきながら最後には「大小さまざまのがらくた類」と言っているのにはどんな意味があるのか？

④ 「唇が動いたが、声にはならなかった。」とあるが、ルントウは声にならなかった口で何を言ったのか？

⑤ ルントウが「旦那様！……。」と言ったのにはどんな意味があるのか？

⑥ 「悲しむべき厚い」を築いたのはルントウか？それとも「私」か？

⑦ 「母はルントウに席を勧めた。」「母が都合をきくと、‥‥」「母は、持っていかぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、と私に言った。」とあるが、なぜ「私は」でなく「母は」なのか？

⑧ ルントウが「香炉と燭台」を選んだのにはどんな意味があるのか？

⑨ 三十年ぶりに再会したルントウとの会話が「世間話」だったのにはどんな意味があるのか？

⑩ 「灰の山から碗や皿を十個余り掘り出した。」とあるが、埋めたのがルントウだと考えられる根拠は？

⑪ 「灰の山から碗や皿を十個余り掘り出した。」とあるが、埋めたのがヤンおばさんだと考えられる根拠は？

⑫ 「今、自分は、自分の道を歩いているとわかった。」とあるが、なぜ「今（そのタイミング）」なの

か？

⑬　ホンルやシュイションの「若い世代」が登場するのにはどんな意味があるのか？

⑭　「（私のように、）むだの積み重ねで魂をすり減らす生活」とはどのような生活か？

⑮　「新しい生活」とはどのような生活か？

⑯　「私は、相変わらずの偶像崇拝だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑った」にはどんな意味があるのか？

⑰　「偶像崇拝」・「手製の偶像」にはどんな意味があるのか？

⑱　「まどろみかけた私の目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。」は新たな希望の出現を意味しているのか？それとも、「つん等のいない風景」＝「実態の内希望の象徴」を意味しているのか？　（関連①）

⑲　離郷途中で「私」の思いは劇的に変わったか？変わっていないのか？

⑳　「私」はどこで故郷を捨てたのか？

㉑　「私」は自ら歩こうとする意志はあるか？あるとすればどの程度か？

㉒　「ヤンおばさん」を登場させた意味は？

協議題	出された意見（〇結論）	残された問題
「問いプードル」を用いた『故郷』の教材研究	**《「問いプードル」について》** 〇「なぜ～か」ではなく「～（叙述）にはどんな意味があるのか」という形の問いを立てることが課題の焦点化につながるとともに、叙述にかえりやすくなる。ただし、表現ではなく文章の構造についての問いだと難易度があがってしまう。 〇「問いプードル」は思考の流れの可視化につながる。子どもに選択肢を与えている点がよい。友の考えとの違いも比べやすい。 ・完成したあと、友だちの「問いプードル」もどうなったか見たくなる。 **《「故郷」の内容について》** ・「偶像崇拝」の意味…所詮他力本願であることの現れ。しかし、その後本文は「希望」と「道」に関する語りが続く →他力本願のままではなく、誰かが道を開いて行かなければ、という作者の考え方につながっている。 ・ルントウが「旦那様！」といった意味…幼少期から変わってしまった「私」や、「私」と「ルントウ」との関係性を象徴している。一方で、身分差をふまえ常識的な行動をとる「ルントウ」の姿を表している。	・「問いプードル」を単元のどこに位置づけるのがよいか ・それぞれ異なる問いに対し短い時間で自分の考えを書くことが難しい生徒もいるのではないか。 →自身で問いを立てることに意味があるが、同じ問いのほうが生徒にとっては書きやすい？

五　研究のまとめと課題

１ 成果

・教育課程会場校の、事前の授業参観や研究会へも参加をさせていただき、大変勉強になった。
・第１回の委員会で教育課程午後の研究協議のもち方について話し合い、およその内容を決めていたため、委員は年間を通じて、委員会の研究内容を意識して実践を進めることができた。

【教育課程研究協議会　午後の研究研究協議について】

・小学校は、国語を軸としたカリキュラムマネジメントの演習に取り組んだ。国語の教科書に示された単元や資料と、生活科・総合、他教科、学校行事との連携について、他校の先生方と意見を交わすことができ、「自校のカリキュラムを見直したい。」と、参加された先生方から大変好評であった。
・中学校は、授業のユニバーサルデザイン化について委員の実践報告をし、グループごとに情報交換をした。ユニバーサルデザインは、特別な配慮を要する生徒だけでなく、全ての生徒の目を輝かせ力を発揮させるための大切な視点であることを学び合うことができた。
　思考ツールの活用、問いの立て方、「故郷」の教材研究など、「多くの先生方と共に考え合うことは大変有意義であった。」と、参加された先生方から大変好評であった。

２ 課題

・研究テーマにある「自己の高まりを実感できる」という点については、取り組みが不十分であった。ふり返り、見届けの観点から、さらに考えていきたい。
・今年度の活動により、委員個人としての実践は充実したが、周りの先生方へ広めることは難しい。委員会の活動が、自校、そして上小地区全体へ還元できる方法を考えたい。

３ 来年度への要望

・教育課程研究協議会午後の部では、小中いずれも時間が足りないとの感想が多かった。しかし、演習の内容は好評だったので、時間配分や内容の焦点化を検討した上で、来年度も演習を行う方向で考えたい。
・小中一緒の委員会なので、それぞれの研究授業（教育課程当日）を見られるとよい。

六　委員名簿

推進係：塚田　　秀（上田市立真田中学校）
委員長：油井　玲子（東御市立和小学校）
副委員：横沢　　尚（上田市立真田中学校）
委　員：青木友佳里（上田市立第六中学校）
委　員：小林　厚志（上田市立丸子北中学校）
委　員：白井　真希（長和町立和田小学校）
委　員：遠山　恒輝（上田市立第四中学校）
委　員：松﨑　未来（上田市立菅平中学校）
委　員：山田　絵里（上田市立豊殿小学校）
委　員：渡部　顕治（上田市立清明小学校）

（敬称略　五十音順）